

交流を通して築いた日中の環

遠藤 葵

大学に入ったら学生交流などの事業で中国を訪れることは高校生のときから夢であった。大学生活では、常に世界を見据えたグローバルな考えを持つ学生たちとの交流が普段から多いが、彼らの中国に対する意見は必ずしも好意的ではないと感じている。だからこそ、私が実際に中国に行くことで中国の魅力を彼らに伝えられるのではないかと考えた。私は、今回の事業に参加するにあたり、二つの目標を立てていた。第一に、日本人としての自覚を持ち、日本の文化を発信できる人材になること、そして第二に、多様な文化、世界遺産や歴史を肌で感じることである。実際に派遣期間中、多くの日本文化を紹介する機会があり、日本の文化の良さを伝えることができたと思う。しかし、まだまだ日本について知らないことが多いということを中国の方との交流を通して感じた。また、今回訪れた北京、景德鎮、深圳、広州の各地域で中国の文化や歴史を知る機会に恵まれ、中国国内でも様々な文化の違いがあることを知り、中国という一つの国としてしか見ていなかった今までの自分の視野が今回の交流を通し、人や地域によって異なるというもっと小さな単位で中国を見ることができるようになった。

第一の目標としてたてた日本人としての自覚を持ち、日本の文化を発信できる人材になることという点では、交流会でのダンスや歌の披露を通して、日本の文化を紹介した。また、日本文化としての歌だけでなく、中国で有名な歌の練習をして、実際に中国の方と一緒に歌う場面もあった。特に、最後の晩餐会で歌った「朋友」は日本人も中国人も交じってみんなで歌い、今回の団のテーマである、「広げよう笑顔あふれる日中の環」の通り、笑顔あふれる輪を作って歌うことができ、日中が一つになったと思う。ダンスや歌には人と人を結ぶ大きな力があると感じている。この力の偉大さは、中国に行く前の出発前研修から感じていた。当初、中国派遣団は延期されたため、メンバーに会うのは、実に8か月ぶりであった。研修初日、久々に会うメンバーの表情は緊張していたが、ダンスの練習でみんなで踊っていくうちに笑顔や会話が増えたのである。ダンスや歌は、日本を紹介する手段だけでなく、人と人との交流を促し、みんなを笑顔にさせる力があると実感している。しかし一方で、文化を発信するという視点からいうと今回の研修で

は悔しい経験もした。

景德鎮は、陶磁器で有名な地域であり、街全体を通してこの伝統を守ろうという雰囲気のある地域である。私たちは、今回この地域でホームステイを行った。ホストファミリーのお父さんは、芸術家であり、数年前に日本を訪問していた。その際に見た日本の陶磁器の素晴らしさについて語ってくれたが、日本に住んでいる私たち自身が陶磁器についてあまり知らなかったのである。日本人として日本文化を発信したいという気持ちがあったにも関わらず、実際は、今までこのような伝統は一部の限られた人にしか関係ないと感じていたのである。そんな今までの自分を恥じた。また、清華大学、景德鎮陶磁大学、中山大学での学生との交流や高度なテーマに基づいたディスカッションでは、彼らの学力の高さを痛感するとともに、頭では分かっているつもりでも、発信できない自分の力の乏しさや、彼らの質問に対して的確に答えることのできない自分の力のなさを感じた。

第二の多文化、世界遺産や歴史を肌で感じるという点では、胡同やいくつかの博物館を訪れて歴史を学び、各地域での食事を通して食の文化の違いがあることなどを学ぶことができた。例えば、食文化の違いである。北京では、餃子を作る体験があった。餃子は日本人にとってもなじみのある料理であるが、包み方が日本と中国では異なり、作る際には大変苦労した。また、白い皮で焼く餃子が一般的な日本に対し、中国の餃子の皮の種類も包み方も日本とは異なり、焼くのではなく蒸すやり方が一般的である。このように、同じ餃子ではあっても、ちょっとした文化の違いに気付くことができた。また、景德鎮では、食事の前にお茶でお皿一式を洗うことやスープから始まる広東特有の習慣があることを知った。このように中国と日本の食事の違いはもとより、中国国内でも違いがあることを学んだ。また食の違いだけでなく街の雰囲気も地域によってそれぞれ特色があることを知ることができた。このように同じ中国でも各地域によって文化や街並み、人の印象の相違を感じることもできるのも2週間という期間内に数か所の地域を訪れる内閣府の交流事業ならではの特色であると思う。

そして、日本文化を発信しようとするときにも、文化や歴史を知ろうとするときにもやはりかかせないのは人

と人との民間での交流だと思う。数多くの出会いを体験する今回の中国訪問であったが、中でも、ホストファミリーとの出会いは中国を知る上でかせない交流であったと感じている。ホストファミリー先でお母さんが作ってくれた家庭料理、親戚中が集まってくれた最大限のおもてなし、現地の学校で学ぶ高校生たちと語り合ったことなど、当初は、中国語で交流できないために、お互い何を話せばよいのか分からず、沈黙することが多かった。しかし、交流を重ねていくうちに、言語の壁を越えて伝えていこうとお互いが創意工夫して積極的に知ろうとしていた。彼らとの交流を通して、日本人であることの自覚、また日本の良さを発信していきたいと思うことができ、一方で彼らの文化、歴史についてもっと学ぼうという気持ちがさらに増した。人と人との交流がない限り、このような文化を発信しようとする力、多文化や歴史を受け入れようとする思いは生まれえないと思う。

この他にも多くの訪問や交流を通して、日本人としての自覚を感じるとともに、様々な歴史、文化を学ぶことができた。その意味では、当初決めた目標は達成されたと思う。しかし、同時に日本のことをまだ知らない自分、歴史や文化について知らない自分にも気付くことができ、これらの悔しさを今後の課題にいかしていきたいと思う。

一つ目は、言語である。言語が十分に通じてなくても交流は可能であり、言語が一番重要だとも思ってはいない。しかし同時に、文化や歴史を知ったり、現地の人と交流したりするツールとしてかせないものであると感じた。実際のホストファミリー先では、最後のお別れの際に感謝すべきことがたくさんあり、日本語であれば伝えられるのに、言語が通じないせいで感謝の思いが思うように伝えられず、もどかしい思いだった。今後、中国語の習得を目指していきたい。

そして、二つ目に日本を知る行動を起こすということである。今回の景德鎮での日本の陶磁器を知らなかったという悔しさをもとに帰国後は、陶磁器で有名な地域に観光で訪れたい。また、広島など日本を知る上で重要な地域にもっと行く機会を持とうと思っている。

今回このような経験ができた私たちは、今後どんな環境におかれても、交流を通して日中友好に尽力していく一人一人になれると信じている。今後団員は各地域に戻り、それぞれの場所で生活をしていくことになるが、この日中友好の思いは変わらずに持ち続けていくことと思う。私は日本各地にこのような強い思いを持った同志がいることをとても嬉しく感じている。

私自身は将来、小学校の教員になることを志している。好奇心旺盛な時期である児童たちにもっと多くの世界を知って視野を広げてほしい。だからこそ、まずは自分が実際に経験し、自分が肌で感じた中国の魅力があり

のままに伝え、日中友好を考えることのできる多くの人材を増やしたいと思っている。

最後に、今回の派遣は延期になったために、当初予定されていたメンバー全員で行くことはできなかったが、今回中国に派遣で行くことのできた青年18人の心のどこかに、行くことができなかった人のことを忘れることはなかったと実感している。なぜなら、彼らの名前が所々で研修中に上がったからである。一度はそろった縁ある人々との出会いを忘れずにこれからも頑張っていきたい。



ホストファミリーのアトリエでの記念写真

日中の、そして世界の懸け橋へ

木下 雄介

私は日中の懸け橋になりたいと考えている。大学2年生の頃に大学で外国人留学生と出会い、初めて外国というものを意識するようになった。当時知り合った留学生たちが帰国するとき、その中の一人が「日本では言葉の壁だけでなく、本音と建前があるコミュニケーション文化もあり、知人はできても親友はできない」と言っていた。それ以来、私は外国人と日本人の間に立って双方の交流を円滑にし、日本と海外をより良く結びつけたいと考えるようになった。

そのためにそれ以降、日本に来る外国人と交流したり、留学に行ったりし、語学を向上させるだけでなく、日本と海外の違いを理解するように努めてきた。その違いの中でも、特に日本から地理的に近いだけでなく、近年著しい経済成長をし続ける中国は、経済に興味がある私にとって一番理解したい国だった。しかし、違いというのはメディアに流れる情報だけでは分からない。毎年夏と冬に私の大学に短期留学に来る中国人のチューターを4回務めたことがあるが、毎回中国と日本の学生の相違点が非常に大きく、日本と中国は一衣帯水の関係でありながら、お互いのことを実はよく知らないのではと感じるようになった。そのため今回の訪中青年事業は、今まで以上に中国を理解するだけでなく、私たちも中国人に日本や日本人のことを伝え、より良い相互理解につなげていく事業であると考えた。そして、この事業は私の夢の実現にきっと役立つと考えたため、参加することを決めた。

実は、この事業に参加する以前に私は中国に6度渡航したことがあり、中国の様子、食生活、観光地などはある程度知っていた。しかし、今回の12日間の訪中事業を通じて政治の中心の北京、400年前から陶磁器を通じて日本と交流していた景德鎮、改革開放以降目覚ましい経済発展を遂げる深圳・広州の全く異なる都市で様々な経験を積み、今までの渡航とは比べられないほどの収穫を得ることができた。その中でも特に大きな収穫が三つある。それは北京での在中国日本国大使館での山本恭司公使との対談、景德鎮でのホームステイ、深圳での華為技術有限公司（以下、HUAWEI）の企業訪問における経験だ。

北京にある日本大使館を表敬訪問した際の山本恭司公使との対談において、外交と民間交流の違いについての認識を新たにできた。山本公使は国の考え方について講義をしてくださり、国の中にはそれぞれ考え方の違う人

がいるが、最終的には国として一つの考えを持たないといけない、だから「〇〇友好」といっても、現実はそのほど甘いものではない、とおっしゃっていた。ただ、現代社会は以前と比べて通信手段の改善が著しく、個人がインターネット上（主にSNS）に発信する情報が、その人的ネットワーク中に急速に広まって世論を形成し、その国民の声は国のリーダーが無視できない存在になるが故に、外交において昔以上に民間交流が重要視されている現状を知った。そのために、私たち一人一人が主体的に相手のことをよく知ろうと努めることや、そうして得たものを周りの人たちに還元していくことがより良い世界を構築していくためにいかに大切なことなのか再発見することができた。また同時に、国と国の関係とは急に改善するものではなく、一人一人の絶え間ない交流を通じて相互理解し、それが周囲の人々に波及して徐々に改善されるものだと感じた。一人、また一人と交流し、相互理解を深めていくことは果てしない道のりかも知れない。しかし、交流の歩みを止まることなく続けていきたいと思う。

景德鎮では朱錫新さんという弁護士の方の家に2日間ホームステイし、相手の生活背景、相手のやりたいことが何なのか考えることや、そして相手が望むことは何なのか考えることの重要性に気付くことができた。私は今まで海外で二度生活し、何度も海外渡航歴があるが、海外で生活することは、相手国の文化や環境を尊重して「郷に入りては郷に従う」という精神のもとで、その国の文化に馴染むことだと思っていた。しかし、今回のホストファミリーは事前に私たちの日程が毎日朝から夜まで大変忙しいことを考慮して行き先を決めてくれ、ホストファミリーの友人から日本人は朝ごはんをしっかりと食べる習慣があると聞いていたので、特別に朝ごはんを多く作ってくれた。また、ホストファミリーは贈り物をくれたり、私のために職場の同僚を呼んで宴会を開いてくれたりもした。丁寧な心遣いの中でも特に中国人の朝ごはんはお粥だと勝手にイメージしていた私にとって、このような相手の文化的視点も踏まえて考えてくれた小さな気遣いが一番大きな感動となった。日本といえば「おもてなしの国」や「サービスの質が非常に高い」と言われるが、島国で異文化に触れる機会が少ない日本においては日本人の日本人に対するサービスが多いのかも知れない。日本人が誇りに思うこのような部分も、個々の異文化をより理解していくことで、まだまだ改善すること

ができるのではないかと考えた。私も人と接する上で、このようなことをさらに注意して、より良い人間関係を築いていこうと思う。

中国の大企業であるHUAWEIを参観した際には、中国の目指す方向性と将来直面するであろう課題を自分自身の目で確認できた。HUAWEIは中国の豊富で安い労働力を利用して近年目覚ましい発展を遂げた中国有数の大企業だ。私はHUAWEIと聞くと携帯電話のイメージしかなく、それ以外にどのようなものを提供しているのか知らなかった。しかし、今回の企業訪問でIoT (Internet of Things) の時代に勝ち残るためにSmart City構想を考えていることを知った。ソーラー発電を利用して、監視カメラが作動し、歩行者の顔を瞬時に識別して、中央に情報を送るといった「モノのインターネット」を体感することができた。このような技術は少しずつ日常生活に溶け込み、新時代の到来を感じさせてくれた。ただ、この構想はHUAWEIだけでなく、ドイツのシーメンスやアメリカのGEといった非常に競争力の高いメガ企業も持っているため、生き残るのは難しいと考え、「IoT分野において高度な技術を持つドイツ・アメリカと比べてHUAWEIの強み・弱みはどのようなものがあるのか」と質問した。しかし、その返答は「競争はより良い成長を早くするので、HUAWEIはイノベーションし続けることに挑戦したい」というものだった。私は、ここに豊富で安い労働力を背景に成長を続けてきた中国が直面する賃金の高騰によって迫られるイノベーションの必要性と、先進国との技術の差というものを彼ら自身も意識していることを垣間見たような気がした。そしてまた、そのような中国がイノベーションを起こす上でこれから直面するであろう課題に対して、基礎研究力や高品質に強みをもつ日本だからこそできる協力の方法があるように感じた。もうすぐ一人の社会人として日本の製造業に携わる。中国や他の国でこのような違いに気づき、お互いがWin-Winになる提案ができるようになりたい。

中国派遣団に参加したことで、私はこれだけ多くのことを学ぶことができた。これも中国に行く前に中国に関連する書籍を読み、しっかり事前準備をしたこと、また中国に行ってから興味のあることには自分から積極的に質問したこと、そして訪中期間日本青年を代表しているという責任感を持って毎日のプログラムに取り組んだことが大きな学びにつながり、自分自身成長することができたと実感している。今後このような事業の存在や私が事業を通じて得たことを周りに伝えるだけでなく、私自身もまだまだ学ぶことを続けていきたいと思っている。そうして活躍の場を中国だけではなく、世界へと広げていき、私の夢である日中の、ひいては日本と世界の懸け橋として日本と海外を結びつけていきたい。

最後に、素晴らしい機会を与えてくださった内閣府の

皆様や中国側の皆様、中国で12日間苦楽を共にした大切な仲間である第38回日本青年中国派遣団の全員に心から感謝したい。

中国・日本の魅力を知る・伝えるということ

佐藤 菜摘

この度、第38回日本・中国青年親善交流事業の日本青年団の団員として平成29年3月7日から18日までの日程で、北京市に4日間、江西省景徳鎮市に4日間、広東省深圳市に2日間、広州市に3日間それぞれ訪問した。2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催が迫り、官民学問わず観光としての日本の魅力の発信に注力される中、私は本事業において中国から見た日本の魅力を知ること、そのための視点を得ることを目標に参加した。

1、中国経済の最先端、深圳市前海地区の視察

表敬訪問や学生とのディスカッション、ホームステイ、企業視察といった様々な角度からの異文化交流プログラムがありどれも非常に印象深かったが、特に印象に残ったのは深圳市前海地区展示場及び前海深港青年の夢工場の視察である。

深圳市前海地区は、習近平国家主席が2012年12月7日に初めて地方視察し、“新时期”と評された中国初の貿易試験区である。香港まで30分圏内であり、シンガポールやフィリピンなど東南アジア各都市への交通面も良く、外資系企業の法人税優遇や外国人の所得税優遇がされ、国際化が進んだ地区である。さらにエコロジーシステム設備の導入など、技術面でも中国の最先端を行く地区であり、中国の経済発展を支えている。

展示場では前海地区がどのように発展し、今後どのような計画で開発されていくかの解説をしていただいた。「中国共産党13期五カ年計画」に則り、先を見据えながらの秩序だった開発がされており、アメリカのマンハッタンや日本のお台場を参考にしながらコンパクトシティの開発としては日本よりも先に進んでいるように感じた。また、1989年幕張メッセオープンでスタートした私の地元である千葉県の幕張新都心も、交通面の良さや「職・住・学・遊」の複合機能が集積し、深圳市前海地区との都市構造が似ているが、たった数年間の開発でありながら技術面で世界の最先端を行くそのスピード感に驚いた。

また、前海深港青年の夢工場では、政府や外国のファン、個人の出資を1~3年間受けて創業、経営している青年たち及びその企業の活動を解説していただいた。夢工場内には現在172社があり、内72社が香港や外国企業で、業種は80%がIT、10%が物流、10%がその他専門

サービスである。夢工場内で創業するのは概ね大学卒業生であり、40代で創業する人もいる。最大で7億円の利益を創出した企業もあると伺い、イノベーションの大切さと今後の発展の可能性の大きさを感じることで貴重な体験であった。

このプログラムから感じた疑問点は、日本の各都市がどのように発展してきたかが深圳市前海地区展示場のようアピールされている場があるのかどうか、それは効果的であるのか、また、日本人として自分が今住んでいる地域が発展を遂げ、どのような特徴を持つのか今まできちんと目を向けてきたのかどうかである。歴史や文化、経済事情など、知らないことはまだまだ多く、それがどのように対外的にアピールされているのかどうか知らなかったことに気付かされた。日本では全国各地、一年を通して、国・都道府県・市町村単位でそれぞれ博物館や美術館等で展示会が実施しているが、効果は十分であるだろうか。各行政・民間レベルで意欲的に情報発信されているだろうか。中国の経済発展の最先端を知る一方で、日本の経済発展はどうか疑問を持つなど、中国のことも日本のことももっと調べたいという気持ちにさせられた、非常にいい経験となった。

2、異文化交流で得られた新たな視点

深圳市前海地区での視察に限らず、北京市、景徳鎮市、広州市でも様々なプログラムを用意していただき、飛行機やバス、高速鉄道での移動から見る街並み、気候や植生、人々の様子の移り変わりを実際に目で見たり、各地の特徴的な食材や調理法が施された中国料理を食したりすることで、中国東西南北の文化の違い、経済レベルの違いを実際に感じる事ができた。

12日間中国文化に触れ続けた後に日本に帰国した際、東京の街並みが新鮮に映ったのが非常に印象的であった。中国に滞在していた間、この建物はどうしてこの構造か、食文化や街並みの歴史的、経済的背景は何か、といった小さな疑問点をたくさん持ち、様々なことに好奇心を持つ習慣がついたことで、日本に帰ってきて自然と実行することができたのではないだろうか。このような興味関心を持つことが、日本やそれぞれの地域の魅力を発掘し、発信する原点になると思う。また、中国での

文化、習慣と比較して日本ではどうなっているのか、など常に比較する視点を持ち続けて事業に臨んだことによって、各国、各地域の異文化交流を進めていく視点を得られたと感じた。本事業で初めて中国の地に降りたつこととなり、事前に本やインターネットで学んだことを実際に経験することができて非常に有意義であった。机上の学習もちろん無駄ではないが、実際にその地で、五感を使って行動することの重要性が身に染みた。

清華大学、景德鎮陶磁大学、中山大學での学生とのディスカッションでは、非常に短時間のディスカッションでありながら互いに笑顔で会話し心を通わせ、交流することの楽しさを知った。景德鎮市での1泊2日のホームステイでも、始めは不安でいっぱいだった中、ホストファミリーの心配りや優しさを通して、どれだけ自分たちが歓迎していただいたかを実感し、笑顔に向けていただいた時の安心感は忘れられない。日本のことをもっと知りたいと言ってくれる人に、笑顔で伝え、もっと知りたいと思ってもらうことの楽しさと難しさを経験することができた。

3、団として行動する難しさとやりがい

本事業の特徴としては、団行動の中でそれぞれ役割分担をし、団という社会の中での「社会貢献」を経験することができることも挙げられる。私自身は総務係として、団の秩序だてと健康管理を担当したが、団員それぞれの行動を注視し、団行動が円滑に進むよう心配りをするのはとても難しく、毎日が反省の連続であった。各団員の日ごらの生活環境が全く違い考え方もそれぞれであるから、互いに理解しあう一方で、同じ目標に向かって進むには非常にエネルギーが要ることを知った。しかしながら、またこれも小さな「異文化交流」であって、相手を理解する基本は、話を聞き、目で見て、笑顔を返すことではないかと改めて感じさせられた。

また、これらの経験を通して自分の中で一番変わったことは、集団行動と社会貢献についての考え方である。私自身、集団行動よりも一人で行動することを好むタイプであったが、互いに助け合うことに非常にやりがいを感じる事ができた。総務係の仕事では、当初は誰が何をするかを分担して任せきりになっていたが、自分が手一杯になったときに他の総務係や総務係以外の団員がさっと手を貸してくれた時、うまく言葉では表せないが嬉しい気持ちになれた。以前の私であれば「自分でできるから放っておいてほしい」と思っていたかもしれない。また、手助けしてもらったと同時に自分も団のためにもっと貢献したいという気持ちが湧いて、集団行動に徐々に溶け込めていったと思う。社会貢献という曖昧な

言葉が、やっと自分の中に入り込んできたような感覚がある。

以上のように本事業では、興味関心の幅が広がったことで視野が広がり、また人との触れ合いを通して社会貢献や異文化交流とは何かを学ぶことができた。

4、日本・千葉の魅力を発信したい

上記の他、本事業12日間での自分の中の変化としては、自分の興味関心が地元千葉県だけでなく日本・中国等の国単位に拡がり、街並みや人といった様々な分野に向き始めたこと、そのことを通して多角的視点を得られたこと、実際にその視点から得られた経験を発信したい気持ちが芽生えたことが挙げられる。これらが無駄にせず、実際に行動に移すことが今の私にできる社会貢献である。

具体的には、興味関心を広げて学び続け、学んで得たことや感じたことを共有し続けていく。まずは職場や身の回りの友人、家族の間で、この事業で得られた経験を伝えていきたい。特に「実際に目で見て肌で感じる事が何より大事な事」「自分が日頃と違う環境に足を踏み出すことが非常に有意義であること」がこの事業で得られた経験であり、共有したいことである。自分が感じたことを伝えて、それをフィードバックしてもらえよう環境を作ることさらに新たな視点を得られると思う。学び、共有する経験を積み重ねながら、最終的には日本の魅力、地元千葉県の魅力の発信にいかしていきたい。学び、共有し続けることで、中国・日本やその各地域の魅力の掘り下げや、発信がますます洗練されていくと思うし、今後、より多くの人々と地域の魅力を語り合い、共有する場を作っていきたい。

また、本事業を通じて自分が社会に貢献したいという気持ちが強くなった。今までは普段の仕事がきつと社会に貢献しているだろうと曖昧な気持ちのまま行動してただけであったが、自分の出来る事をもっとしたい、自分の可能性をもっと広げたいという考えが生まれた。日本・千葉の魅力を発信したいという気持ちと、社会に貢献したいという気持ちを相反させないよう行動したい。

最後に、中国派遣が延期となった際もこの事業の実施に尽力してくださった全ての皆様に厚く感謝を申し上げたい。

見て、聞いて、感じて、考えて

三田村 美穂

今回私は、第38回日本・中国青年親善交流事業の中国派遣団として、平成29年3月7日から3月18日の間に北京・景德鎮・深圳・広州を訪問した。

私が、この事業に参加したのは、募集が開始された当時、大学にいる多くの中国人留学生と交流するうちに中国について興味を持ったことがきっかけである。過去に青年団として派遣された先輩方から話を聞くにつれて、私も実際に参加したいと思うようになり、参加を決意した。そして、実際に参加してみると想像以上に多くの知識や経験を得ることができた。

この事業で得たことは大きく四つある。

一つ目は、中国に対する知識と理解である。博物館や伝統建築、伝統産業を視察することで、中国の歴史や慣習を学ぶことができた。今まではメディアを通してでしか見たことがなかったが、実際にその場所を訪れることによって、当時の雰囲気や人々の様子が思い出され、新鮮な気持ちで視察することができた。伝統文化を重視し、歴史的建造物の保護に力を入れている点に感動し、日本における文化財保護の活動について学ぶ意欲が湧いた。一方、北京や景德鎮の街を歩いてみると、巨大なビルや立派な建物がある一方、全く整備されていない古い建物やがれきの山があり、格差というものを感じた。また、でこぼこになった道路や衛生環境があまり良くないトイレを見て衝撃を受けた。中国に行く前の私は、メディアで知る「GDP第2位の経済大国」としての中国の一面しか知らなかった。しかし、実際に現地に行ってみると、通信ネットワーク技術を使って高い質のテクノロジーを創出しているHUAWEIや中国最大のインターネット総合サービスとしての実績を誇るテンセントなど経済大国として発展している部分があれば、格差やインフラ整備があまり整っていない点で「途上国」としての中国も知ることができた。中国側も途上国として残された課題を悲観することなく前向きに向き合い、さらなる発展を目指して改善しようとする姿勢がみられ、中国には、まだまだ多くの可能性があると感じた。日本においては、現地で感じた中国の前向きな姿勢を伝えていきたいと思った。

今まではメディアを通じた情報が「中国」というイメージを作ってきたが、実際に中国を訪問させていただき、様々な経験をすることで、メディアを通してみるのとは違った中国の一面を発見し、そのことによって両国の違いを理解し、受け入れることができるようになった。

た。日本と中国には違いがあり、その違いを意識しつつ、理解することが大切であり、互いに尊重できる部分を持っており、そういったところから日中友好が実現できると感じた。特に中国の優れたところを経済面でも文化面でも日本が参考にできると感じた。

二つ目は、尊敬できる仲間と出会えたことである。この事業は、学生から社会人まで全国各地から様々な知識や経験を持つ方々が集まっている。そうした中で、一つの目標に向かって互いに協力し、努力し合える仲間に出会えたことが私にとって大きな財産となった。事業中では、困難にぶつかることも多く、途中で中だるみしてしまうこともあったが、仲間同士でしっかりと話し合い、今後の方針を決め、皆が自立した気持ちで前向きに頑張っていたので、そうしたメンバーに出会えたことに感謝した。

また、私はディスカッション係だったので、清華大学、景德鎮陶磁大学、中山大學でのディスカッションでは、記録をとるだけでなく、皆が意見を述べやすい環境を整え、有意義なディスカッションになるよう努力をした。結果的に三つの大学で行ったディスカッションは大変実りあるものとなったが、これは、私個人のみでなく、仲間の協力と助けがあったからこそ実現できたことである。私が、中国語を話せず、うまく意思疎通が取れないことがあっても、団員の中で中国語を話せる者は、間に入って通訳したり、テーマから話題が逸れそうになると、私が間に入るまでもなく、話題を元に戻したりするなど多くの点から仲間に支えられた。私自身も記録をとりつつ、自分の意見を伝えながらディスカッションを楽しめ、仲間と協力し合うことの大切さを実感した。

活動中だけでなく、活動外でも仲間に助けられたことは多い。移動のバスの中で、他愛のない話をするともあれば、互いの夢について語り合ったり、悩みを相談することもあった。そうした本音を話し合える仲間に出会えたことが本当に嬉しく、事業後も交流を続けていきたいと思った。

三つ目は、言語の重要性である。ホストファミリーとの交流では、本当に伝えたいことが伝えられない点で、お互いが理解できる共通の言語を使わなければ心から意思疎通を図ることは難しいと感じた。感謝の気持ちを伝える時、お願いをする時、質問する時、私はそれらを伝える手段がなく、表情やしぐさや動作で伝えるのが精一

杯であった。ホストファミリーとの別れの際も、本当はもっと言葉で伝えたいことがたくさんあったが「謝謝」の一言しか言うことができず、悔しい思いをした。事業開始前にもっと語学について勉強しておけばよかったと後悔しつつ、そうした経験をいかし、帰国後は、語学にも力を入れ、中国語、英語を勉強しようと決意した。言葉が通じなくても交流はできるが、やはり言葉の壁を超えてこそ、心からの交流ができるものだと強く感じた。

四つ目は、日本に対して興味・関心と感謝の気持ちを持てたことである。景德鎮では、陶磁器を通じて歴史や文化、生活様式を実際に体験することができた。陶磁器という文化が古い時代から現代まで続いていることに感動しつつ、日本にある伝統産業がどのような変遷をたどって、現代ではどのような形として残っているかを調べようと思った。というのも、私は、今まで日本においてここまで一つの文化に長く触れる機会がなかったため、この経験をいかして、まずは地元の伝統産業について調べようと思った。

また、私は、自分がいかに恵まれた環境にいるかを実感することができた。インフラが整っていること、空気が新鮮であること、全てが当たり前だと思っていたが、実際には、当たり前でなく、そうした恵まれた環境にいることに感謝した。それと同時にそうした環境でないところに対しては日本のインフラ技術を使って、より良い生活環境を作りたいと思った。中国は、優れている点も多くある一方、大気があまりよくない点で、環境を犠牲に経済が発展している印象を持った。日本もかつてそのような時代があったので、発展には犠牲がつきものであると思いつつ、やはり環境も配慮できるように生活に余裕を持たせることが必要だと感じた。そのためには、まず、生活環境を整えるための仕組みづくりが重要であると実感した。私は、現在大学で環境系サークルに所属しているので、そこから改善の糸口を見つけ、実際に取り組んでいくつもりである。

この事業で、多くの経験をし、多くの人々と出会った。私自身も新たな視点で物事を見ることができ、視野が広がったと感じた。日本に帰国し、日常生活に戻っても今まで見てきた世界とは少し違った新しい世界が見えてきて、改めてこの事業に参加してよかったと感じた。最後にこの事業に携わった仲間、そして日中両国の関係者様に感謝しつつ、自分が実際に中国で得たものを帰国後多くの人たちと共有していく。そして、より多くの人たちが新しい視点で中国について考えていただければ幸いである。